

## 6 「NPO法人炭鉱の記憶推進事業団」【岩見沢市】

三笠市幌内出身の理事長が中心となり、形ある炭鉱遺産から、その奥に埋もれている誇りや思い出、仕組みや技・・・といった形のない炭鉱遺産を手がかりに地域を元気にする活動を幅広く展開しています。



炭鉱のイメージは暗い。  
しかし、  
炭鉱は本当に暗いのか？

## 理事長 吉岡 宏高さん



Q：吉岡さんのご出身は？

A：三笠の幌内です。空知で、一番最初に炭鉱ができたところ。わたしが大学のときに、親父が炭鉱病院の閉鎖で退職。それで、「さよなら」する暇もなく、故郷と「さよなら」しちゃった。

Q：活動の原点は？

A：自分の育ったところっていうのは、北海道の開拓にとって絶対話として出てくる。そこが自分の出身地なわけでしょ。それなのに「炭鉱の暗い過去を払拭する」って。なんで「暗い」って言うの？って。炭鉱があって、町が出来たはずなのに、自分の過去

を偽装しているようなもんじゃない。それが、凄く納得出来なかったんだよね。何もないわけではない、暗いわけでもない、ただ生かしていないだけだって。

Q：仲間をどうやって増やしていったのですか？

A：最初は、やっぱり外の人の方が多かったよ。自分の地域をいいと思ってないから。大切なことは、「流れを作る」こと。一丸となってゴールに向かって行くなんで、あまりにも複雑でゴールが見えてこない。だから、足下にある資源を使って自分らしいことをするのが一番に決まってる。それが、どういう形でゴールするかは見えてないんだよ。でも、そこに向かって、とにかく一步を踏み出さないとそこには行かないし、可能性も出てこない。その一步を踏み出す勇気っていうのを我々が進んでやって、「なんかそういう道筋が出来てきたな」って感じてもらう。そうすると、なんとなく進んでいく。ようやく、そういう流れになってきたかな。

Q：今後の目標は？

A：北海道民である限り、「一度は空知に来ている」と。今日の豊かな暮らしをもたらした産業化だとか、工業だとか、鉄道だとか、電力だとか、そういったものを理解するためには、やっぱり空知に来てないと。必修科目だと思うよ。「空知に行ったことないの？」って、そうなることかな。

## インタビューを終えて（生涯学習課：川森 功偉）

人口減少社会と言われているが、炭鉱は急激な発展と衰退の両面を経験していて、各自治体が遭遇するであろう10年先の姿と語る。吉岡氏は「すでに起きた未来」がここにある。是非、空知を鏡として、今の自分たちの町、未来の自分たちの町を見つめてほしいと話してくれた。

詳しくはこちら

